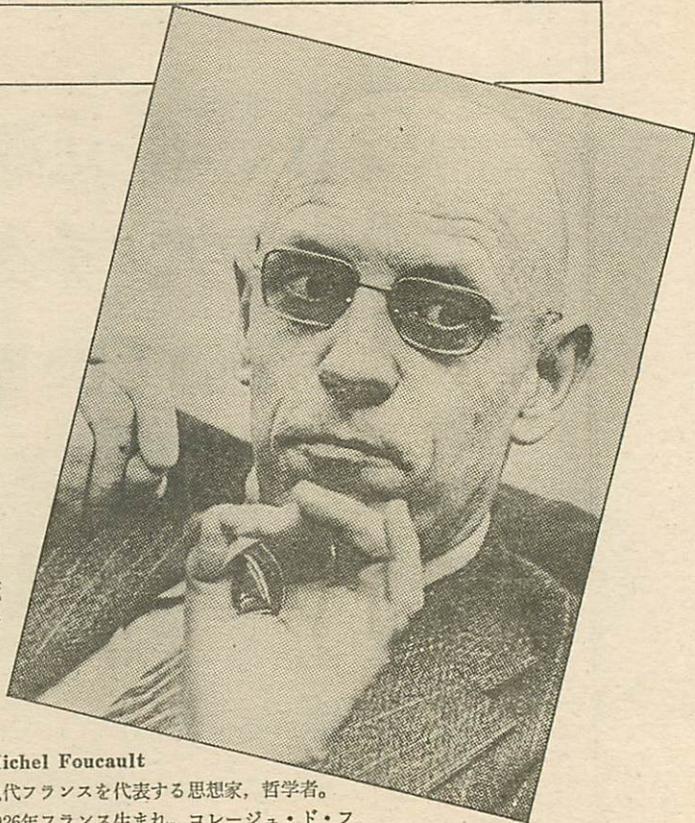


思想のゆくえ

今村 仁司 (東京経済大学教授)



Michel Foucault

現代フランスを代表する思想家、哲学者。

1926年フランス生まれ。コレージュ・ド・フ

ランス教授。反哲学・反合理主義の立場で、1968年の仏・五月革命に大きな影響を与えた。構造主義の枠を超える現代思想の牽引者でもあった。主に『狂気の歴史』『言葉と物』『知の考古学』『監獄の誕生』など。最近8年間の沈黙を破って、『性現象の歴史』第2巻と第3巻にあたる『快楽の用法』『自己への配慮』が刊行されたばかりだった。

中村 フーコーがいま死ぬと
いうことは全く予想しなかった
ことですから、そういう点では
驚かされた。やはり何か一つの
時代が終わったのかなあという
ことを考えるきっかけにはなる
んじゃないかと思えますね。サ
ルトルなんかと違って、大知識
人で、その人によって時代全体

を代表させるといふような人が
いなくなった中で中心的人物
のような人ですから、そこいら
はちよつと扱い方が難しいと思
うけれど。
日本では、一休、構造主義が
何であったかが必ずしも明瞭じ
ゃないし、特に入ってきたとき

ミシェル・フーコー氏が亡くなった。現代の思想界をリ
ードするフランスにあって、一貫して時代を挑発し、衝撃
を与え続けた「知の巨人」であった。歴史学者にして科学
史家、文学者、そしてなによりも、驚くべき強靱な精神に支

には、イデオロギー終焉の思想
ということ、反マルクス主義
的だということ、構造主義を考
えることは、フランスの哲学な
り思想を考えるだけじゃなく
て、われわれ自身をも考えるき
っかけになるだろう、と思うん
です。

今村 フーコーが死んだとい
うことの現時点での受け止め方
としては、ぼくもいまおっしゃ
ったのと同じように思います。
フーコーっていうのは、先輩
の思想家に対しても後輩に対し
ても非常に影響力が強く、この
二〇年間は目に見えない形での
強烈な牽引力を持っていった。

それが途中でばたりと途絶える
ということ、おそらくはフラ
ンス現代思想の動きの中から、
目には見えない形で緊迫感とい
うものが消えていく恐れはある
だろう、そういう気はいくぶん
しておるわけですね。

中村 構造主義以後といつて
もいいと思うんですけども、こ
の切れ目は、フランス現代思想
の中で意味があるだけじゃなく
て、それこそ人類の哲学思想の
中でもかなり大きな問題を含ん
でるだろうと思う。

今村 構造主義の特徴づけと
いうことになりましたが、非常に
やりにくい面があるんで、大き
っぱにぼくの観点だけを出しま
すと、ぼくは構造主義を見る場
合、狭い意味での哲学思想と
か、そういう感じは全然持つて
おらないんですよ。

ぼくの場合は、いわゆる科学
的認識の一つの方法的な視点と
いうことで押さえ、具体的には
レヴィ・ストロース、ジャック
・ラカンとかに典型的に代表
されるわけです。アルチュセー
ルとかフーコーとかは、厳密な
意味では構造主義には入れにく
いし、入れている考えにくいとい
うふうに思っているわけです。共

えられた「最後の哲学者」。フーコー氏は、思想の系譜の
中でどのように位置づけられるか。そして、フーコー氏亡
き後の世界はどのように動いていくのか。中村雄二郎、今
村仁司両教授に語り合ってもらった。
(編集部)

「不幸の時代」の哲学者

フーコー亡き後の

中村 雄二郎 (明治大学教授)

対談

ことは押さえておかねばならない。どう転んだところで、あれは後戻り不可能な、科学的知識の前進の一つの里程碑になっておる。

その仕事を踏まえて、フーコーだとかアルチュセールだとか

ニーチェとカントの両側面をもつ哲学者

中村 それをなぜフランスに出たかっていうのはすごく大きな問題で、これはやっぱりフランスのデカルト主義の伝統が強いからだと思っんです。デカルトという、非常に明確な敵、相手があつたこと。これが大きい。

それから、ちよつと別の観点からいうと、サルトルまでは、要するに人間の自立とか神の追



なかむら ゆうじろう 一九二五年東京生まれ。『パスカルとその時代』『感性の覚醒』など著書多数。東大卒。哲学者。

がその後出てくる。ドゥルーズもデリダも同じ圏内で動いているということ、一九六〇年代というのは、レヴィ・ストロースやラカンの集大成の時期、ある意味では終わりの時期ですよ。フーコー、アルチュセー

放とかいっのをやってたわけだ

けれども、その中にいくつか、サルトルがあんなにがんばったにもかかわらず、やはり思想の惰性みたいなものが残つた。たとえば、人間とか歴史とか意識とかかっていうのが、やはり近代哲学の非常に大きな筋であつた。そういう、歴史とか人間とか意識とかいう、ある意味じゃわれわれにとつてずしんと



いまむら ひとし 一九四二年岐阜県生まれ。著書に『労働のオントロギー』『社会科学批評』など。京大卒。社会思想家。

ル、デリダというのは、それを吸収しつつ、いわゆるポスト構造主義みたいな形で、ある者は歴史学の領域、ある者は哲学の領域で仕事を展開していく、そういう時代だったろうと思うんです。

くろものがあつて、それが人間主義的なマルクス主義とかサルトル的な哲学の魅力だつた。だけど構造主義の問題でいえば、そういうわれわれにとつてずしんとくるものつていうのは、逆にいうと思考の惰性に乗つていけるんじゃないか、それ自身が自己欺瞞ではないかということですよ。

もう一つは、明らかにサルトルに至るまで、ヒューマンイズムといわれたことが結局はヨーロッパ中心主義じゃないか、という問題です。ヨーロッパの知識人とか、あるいは限られた人間のものだつたということですね。そこでたとえれば、レヴィ・ストロースの「未開人」とか、フーコーの「狂気」とか、ある意味ではアリエスの「子供」み

たいなものが出てくる。そういう点で、構造主義はそれこそ哲学ではないわけね。ただないんじゃなくて、積極的になんと思ふ。つまり一種の反哲学ですよ。反哲学って言葉もそれこそ非常にわかりにくい言葉だけれども。ただ、やはり哲学が万学の王という形、それも実際にパワーがありやいんだけれども、ないくせにそういう形をとつていたわけですよ。しかし万学の王ではなくて、本来はメディアエターである、むしろ哲学の地位つていうのは、個々のあらゆる領域に拡散していくべきだという形の知の展開があつたということですよ。

今村 フーコーの初期の著作を全体として見ますと、彼は直接的には歴史学の仕事をやってたわけですが、通常の歴史学というのではなくて、すでに始まつていたアナル学派のインパクトもあり、そういうものを踏まえてもう一度、先生が強調される「まなざしの巡回」ということを、科学認識論者としての仕事を同時にやり続けた人だとばかりは思っんです。

中村 前から思つていたの

は、フーコーというのは、ちょ

っとニーチェとカントの両方の側面があるような人だということなんです。カントだって初期にはそういう仕事があつたみたいですけど、それこそ、やけどしてしまふような領域ね。狂気でもそうだし、監獄でも、まあセックスの問題でもそうだけど、そういう問題に触れた人でしょう。

今村 フーコーが歴史学の研究をする際の精神の構え方は、彼もしばしば強調しているニーチェのゲネアロギーという系譜学の発想で、非常に解体的で破壊的で……。

中村 だから、デコンストラクション(脱構築)というのも、もうすでにフーコーが始めているわけ。

今村 やっていますね。ぼくは、フーコーの仕事というのは非常に多面的だというふうに解釈するわけですけども、『臨床医学の誕生』から『知の考古学』というのは、新しい歴史学の先端を、水平線を、どんどん高めて切り開き、同時にエビステモロークとしての仕事をした。これが一つの段階ですね。『監獄



の誕生』というのは、ガラッと変わると思っています。『監獄の誕生』以降は単純に構造主義というふうにいえないような、新しい傾向を示しておるんじゃないかという気がするんです。フランスに限らないんですけども、ヨーロッパの現在というのは、権力の問題、もちろん国

微視的な運動から出発し直した新権力論

今村 『狂気の歴史』は、初発において近代とは何であったか、その解明の問題意識が非常に強かったと思うんですよ。ところが『監獄の誕生』は、同じく大監禁のシステムであつても、今度は「現代とは何であったか」という問題を考えていく。現代の資本主義システム、

家を中心とした権力、社会システム全体における権力や権威や閉じ込めやというような問題が非常に重い。それを『狂気の歴史』のような歴史学的な解剖じやなくて、もっと突っ込んだところから、権力の新しいセオリーというものをつくりつつやっ

ていこうとする。そこから実践的な展望が出てきている。中村 そうね。事実、監獄に

フーコーのずいっと長く続いておる反哲学としての哲学ですか。中村 ヌーボー・フィロゾフといわれている若い人たちが、グリユックスマンとかレヴィとか、いろいろいますよね。ある人たちは非常に神秘主義だし、あるいは右翼的だしというのでちよつととまどつただけ

国家システムの問題を批判するといふのとどまらず、二〇世紀の生んだファシズムやスターリニズムの問題まで射程に入れて解剖できるような視点を持つ。いままでのような国家中心主義的な権力論では全然もうだめだから、もう少し市民社会の

的な権力運動というものから出発し直そう——これが大きかったと思うんですね。

中村 こらもいえるんじゃないんですか。『狂気の歴史』というの、英米訳の題名は『理性の時代における狂気の歴史』ですよ。まさに理性の時代なんです。同時に、理性が秩序をつくるんじゃないくて、秩序が理性をつくるという考え方もすでに

中村 おそらく彼らはこういう印象を持ったと思うんですね。つまり、フーコーのような形で明らかにされた西欧社会の管理と強制と監視のシステムは、何も近代資本主義社会、西ヨーロッパだけではない。革命をやつたにもかかわらずロシアの体制も同じことだ。

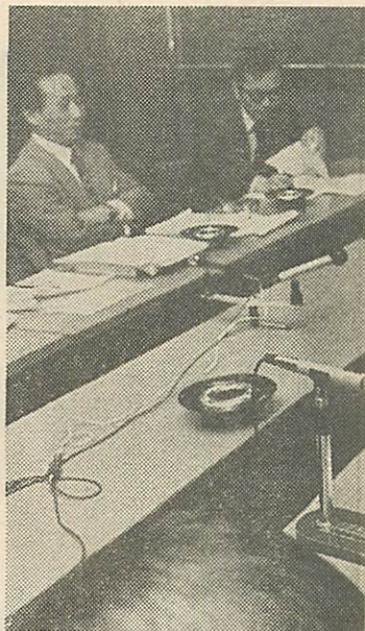
じゃあ、何やるか。もう何もやれない。閉塞だ。この際やるのは、非常に消極的な態度をとって、ともかく風刺的であれ何であれ、そういうものを茶化

ば、当然、管理社会になる。今村 そういう意味では、もう単なる政治権力論の問題でもないし歴史学の問題でもなく、

中村 ヌーボー・フィロゾフといわれている若い人たちが、グリユックスマンとかレヴィとか、いろいろいますよね。ある人たちは非常に神秘主義だし、あるいは右翼的だしというのでちよつととまどつただけ

していくぐらの形のイデオロギイ論戦をやるか、過去の自由主義の伝統に戻るか、さもなければ、おそらくこいつが一番大きいんでしょうけども、伝来のカトリシズムへ逃げ込むかだ、ということになったんだと思うんですね。

中村 ただ、とっても大事なことをやっぱり彼らはいってると思いますね。たとえばグリュックスマンの『思想の首領たち』として訳されている本にしろ、フィヒテとかカントとか



ミシェル・フーコーは二度来日した。フーコー(右手前)と日本の学者とのシンポジウム「哲学の変貌」(一九七八年五月二六日、東京・日仏会館で)

マルクスとかいいう人たちがやっただけ系つくりが強制収容所の思想につながると思っている。ヨーロッパの哲学的知の自己批判としてはすごいもんですね。

神を追放した人間が「まやかし」に見えた

今村 その意味では、三〇年代のアドルノやホルクハイマーの問題意識と非常に重なりますね。フーコーもちよろっとフランクフルト学派に言及することがありましたけど、よく読んではずです。同じ時代のにらみすえ方をします。そしてその際、哲学者、あるいは思想家としてどういう道筋をとるかというスタイルの問題として、もう自由に、おおらかに、はできない。下手すれば強制に担担することになるから、じゃあどうす

るか。単純に逃げるわけにもいかない、といったことがあって、そういうのはさまでやっていこうというのがフーコーの悩みであったらと思うんですね。若い人は、逆に「もうやめちゃえ、やめちゃえ」ということで、古きよきカトリシズムへ(笑い)、という道はあったらうと思うんです。

中村 ああ、いづれかを見てると、やっぱりフランスは、基本的にカトリックの国だし、そこが一つの大きな逃げ場所だな

ども、まさかそんなことはできないとか、したくないとかいうことをしゃあしやあやとやったかたでしようね。

今村 日本だと浅田彰なんかは比較的そうかもしれない(笑い)。浅田君はともかく、ヌーボー・フィロゾフの役割はせいぜいそこまでであって、その後どうするかという点では、デリダとかドゥルーズとかフーコーを含めての仕事がずっと持続したわけですね。

中村 私はフーコーは、あの意味じゃ一方で本当にフランスの中心的存在であるだけに、いかにそれからはずれようとするかという葛藤がすごいと思うんですね。たとえばパスカルの中に、人間が狂気でないというのはいくつもの狂気のあり方だ、というふうな言葉があった、これをフーコーは『狂気の歴史』に引いているわけですよ。べつに、理性と狂気だけではないけれども、何かそういう対立するものの中に自分を投げ込んでるところがある。

今村 現代のフランスには、普通なら真つ当な大学で終わってもいいフーコー、あるいは

アルチュセールみたいな人が、どちらかというと狂気に走り込んでいかなければならない圧迫みたいなものが、文化としてますます高まっておるといふようなことがあるんでしようかねえ。

中村 一つには、フランス文化がある意味では非常に理詰めであっただけに、そして誇りが高かっただけに窮地に追い込まれていった。それは確かだと思ふんだ。ただ、もう一つ、と、さっき広い意味で構造主義だといわれた人たちは、情性に反して考えようとして、マルクス主義も情性的であり、サルトルも情性的であると、それを全面批判やっただけです。つまり自分たちはもう本当に万有引力に反したことをやっていると

いった気があったと思う。しかもそれは、途中で上がっちゃって偉い先生に終わるんじゃない、もう始めた以上は最後までやらなきゃいけないみたいなところがある。その意味では、やはり反哲学は量の上では死ぬないものなんだな、という感じが非常に強いんですね。

今村 六〇年以前のサルトルやメルロ・ポンティの仕事は、

上手な本づくり

50のポイント

野村保憲著 技術をいかに生かし、いい本を安価につくるか。出版、印刷、製本、資材の場で具体的に適用できる実践教室。(7月10日刊) 一六〇〇円

第二書房長谷川巳之吉

林達夫・福田清人・布川角左衛門編著 戦前 独特の美装本で精力的にヨーロッパ文化を紹介し、全国知識人層を魅了した第一書房の歴史と社主・長谷川巳之吉の生涯。(7月24日刊) 五二〇〇円

イメージの鎖

— 絵画のかたちと意味 —

梅田一穂著 新しい美術史研究の立場から、現代に至るイメージの連続と変質の姿を明らかにした恰好の絵画入門。図版145点。 二六〇〇円

子どもの本をつくる

— 創作児童文学の時代 —
小宮山豊平著 児童書出版ひとすじに生き、数かすの名作を送り出した理論社会長が、子どもの本づくりにかける「希い」を綴る。 一八〇〇円

出版学校 日本エディタースクール

編集者養成

出版ジャーナリストへの唯一の専門校
企画・本づくり・雑誌編集
校正・レイアウト・文章

夜間部秋期生受付中

- 編集者養成科——9月10日開講/1カ年
総合・6カ月基本・3カ月選択の各コース
- 文章力養成科——10月18日開講/基本
文章・ジャーナリズム文章教室各6カ月
- 昼間部——**学校説明会/23実施**
- 総合科2年課程・総合科1年課程/10月1日より受付開始・60年4月開講
- 通信教育部——毎月開講・随時受付
- 三大通信教育部▷編集コース(8カ月)・校正コース(8カ月)・文章コース(6カ月)
- *入学案内書要千300 J 保完

〒162 東京都新宿区市谷田町1-6
電話03(260)5891(代) 振替東京4-8265

外から見ると比較的自由だと
か何かいわれて、非常に開放的
な文化運動のように見えただ
けれど、フリーたちに即し
て見ると、やっぱりそれもまた
狭く押し詰めるような運動に見
えてたということですか。

中村 というよりも、サルトル
たちの場合には、人間に対す
る信頼があったでしょう。左翼
に対する信頼もある程度あつた
でしょう。いや、人類に対する
信頼みたいなのがあつて、しか
もそれにフランスがブラスの役
割を演じられるという状況があ
つた。そしてフリーたちはサ
ルトルを学んで育った人たちで
すね。そのサルトルは、神を追
きにはないと思うのね。

世紀末の大転換の時期に入った欧州文化

今村 そこで問題になるの
は、ヨーロッパの文化の現状の
突破の仕方ではないか。それは
いま、進行中だと思いませんか。
で、どうでしょう、やっぱり単に
フランスだけのちよっとしたア
イデアだということじゃなくて、
あれだけデリダがはやったり、
ドゥルーズもうじきはやるか

もしれないし、そういう共鳴板
を持つということ、ヨーロッ
パ文化全体がいま二〇世紀末の
大転換の時期に入っておること
を示しているのではないかと。
中村 そうだと思いませんね。
やはり近代文明を担ったヨーロ
ッパ全体がそういう問題に突き
当たっている。そして、われわ

れ日本人みたいに近代一〇〇
年、ヨーロッパにつき合ってきた人間
にとっては、これまた他人ごと
ではないということにな
るんじゃないかな。

今村 そういう意味では、構
造主義は単に終わるだけじゃな
くて、いろんな形で分解され吸
取されて、さまざまな領域でヨ
ーロッパのいわば内部からの自
己批判運動につながる。いまフ
ランスでは、アドルノ、ベンヤ
ミン、ブロッホなどの翻訳運動
というのは非常に激しいです
ね。つまり、三〇年代のドイツ
も似たようなことをやっとな
やないかということ、その先
達の再評価運動がいま始まっ
た。似たような形での両体制の
権力、つまりファシズム的な権
力と共産主義的な権力とのほざ
まの中でどうするか、という問
題意識が非常に重なる。

今村 ある意味では、それは
非常に不幸なあり方かもしれな
い。日本のほうが幸せかもしれ
ない。思想家も、のんびり、八
〇歳まで生きてゆっくり死ねま
すということなんです。学者
のあり方としてはちょっと問題
じゃないですか。

中村 そうだと思いませんね。
やはり近代文明を担ったヨーロ
ッパ全体がそういう問題に突き
当たっている。そして、われわ

れ日本人みたいに近代一〇〇
年、ヨーロッパにつき合ってきた人間
にとっては、これまた他人ごと
ではないということにな
るんじゃないかな。

今村 そうだと思いませんね。
やはり近代文明を担ったヨーロ
ッパ全体がそういう問題に突き
当たっている。そして、われわ

今村 そうだと思いませんね。
やはり近代文明を担ったヨーロ
ッパ全体がそういう問題に突き
当たっている。そして、われわ

今村 ある意味では、それは
非常に不幸なあり方かもしれな
い。日本のほうが幸せかもしれ
ない。思想家も、のんびり、八
〇歳まで生きてゆっくり死ねま
すということなんです。学者
のあり方としてはちょっと問題
じゃないですか。

暗闇に幼児がひとり、恐くても、小声で歌をうた
えば安心だ。子供は歌に導かれて歩き、立ちどま
る。
ドウルーズ & ガタリ

'95. 6. 13

周知のように、フロイトの精神分析理論
の要をなすものにエディプス・コンプレ
ックスがある。息子の成長過程での父親
との精神的葛藤である。これがただだけ人
類に普遍的であるかを問直して、哲学者

のシル・ドウルーズと精神分析家のフェリ
ックス・ガタリは名著『アンチ・オイディ
プス』（一九七二年）を著した。

ガタリ



ドウルーズ



彼らは、エディプス・コンプレックスを
フロイト時代の近代家族の親子関係をギリ
シア悲劇の『オイディプス王』に投映した
ものだと思なして、資本主義と欲望の問題
を鋭く追究したのである。このドウルーズ
とガタリが次に共著で書いた大著は『千の
プラトール』（一九八〇年）と題された。

『プラトール』とは、直訳すれば高原のこ
とだが、G・ベイトソン（『人類抄』
参照）の用法にしたがって、へさまさまな
強度の連続する地帯を意味させている。

この本はそういう表現の形式と内容を狙っ
たものであり、十五章から成る全体の一つ
に「リトルネッコについて」と題された章
がある。

人類知抄

百家言 89

題字・中川 幸夫

中村 雄二郎

がある。

「リトルネッコ」とは、イタリア語でリ
フレインを表す音楽用語である。この章の
最初のページに、パウル・クレール（『人類

最初に出てくるのが、冒頭に掲げたこと
ば、「暗闇に幼児がひとり、恐くても、小
声で歌をうたえば安心だ。子供は歌に導か
れて歩き、立ちどまる」であり、それにつ
づけて、次のように書かれている。「道に
迷うことがあっても、なんとか自分で隠れ
家を見つけ、おぼつかない歌を頼りにし
て、どうにか先に進んでいく」と。

ここには、私たち人間にとって声を出
し、歌をうたうことが精神的にどんなに大
きな働きを持つかが示されている。そして
当然ながら、歌をうたうことはリトルネッ
ロやリズムに深く関係してくる。その点に
ついて著者たちは次のように書いている。

リトルネッコこそまさに音楽の内容であ
り、そこにリズムが生まれる。一人の子供
が暗闇で心を落ち着けようとしたり、両手
を打ち鳴らしたりするところにも、それが
ある。リトルネッコのモチーフには、不

安、恐怖、悦び、愛、労働行進、場所の領
有など、さまざまでありうる。いや、リトル
ネッコの問題は人間だけにどまらぬ。

メシアンが音楽的に「小鳥」を発見した
のは、まさにその点である。すなわち、作
曲家自身が言っているように、「音楽は人
間だけの特権ではなく、宇宙もコスモス
も、リトルネッコで成り立っている」ので
ある。こうして、エロロジストたちが動物
に見いだしたことを、メシアンは音楽に見
いだしたのだ、と著者たちは言っている。

これはたいへん重要な指摘である。先に
「アシジのフランチェスコ」の項（『人類
知抄』56）で言及したメシアン作曲のオペ
ラ「アシジの聖フランチェスコ」が世界各
地の鳥の鳴き声を縦横に採り入れ、フラン
チェスコをめぐる各人物に割り当てたこと
の意味も、このような観点から見るととき
どころよくわかるのである。（哲学者）

◆◆◆知の狩人の詩

—現代フランス思想への招待—

第16回 F. ガタリ

スキゾ分析に向けて

花村 誠一

フェリックス・ガタリは、1930年生まれのフランス人(その名からおしはかるとイタリア系か)で、薬学と哲学を学んだ後、ラカン率いるパリ・フロイト派の中で自己形成を遂げるが、医師として養成されたことはない。精神医療へコミットするのは、ジャン・ウリが1953年クール・シュヴルニーに設立したクリニック・ド・ラ・ポルドにおいてであり、やがて、精神分析から制度分析(analyse institutionnelle)という独自の立場へ転回する。大きな飛躍は、しかし、あの「68年5月」直後、哲学者ドゥルーズとの出会いによってもたらされるわけで、この当代随一のニーチェ研究者との共同作業を通じ、一挙に、スキゾ分析のいまある形が整えられたと言える。彼らが掲げる現代世界の見取り図たるや、まさにメガロマニアック(巨大妄想的)なほど広大無辺であるが、その隅々に、精神医学や精神分析の知見をまったく新規なやりかたで役立てていることには驚きを禁じえない。

スキゾ分析は神経症ならぬ精神病をモデルとし、それゆえ、精神分析を分析できる強力な理論とされるが、ヤスパース以来、精神医学には、精神病のほうを一次的な、つまり無媒介的な体験とする慣わしが定着している。実際、かつてのヤスパースによる精神分析の「かのごとき了解」批判と、ガタリらが今日、精神分析を悪しき表象体系と斥けることとの

間には、一脈相通ずるものがあり、こういう連想もあながち見当外れとは言えない。私はさらに連想を逞しくし、ガタリの師匠であったラカンの排除(forclusion)の概念、あるいは、その師匠であったドゥ・クレランボーの精神自働症(automatisme mental)にまで、その系譜をたどってみたい気がする。スキゾ分析からみれば、精神医学と精神分析という両陣営間の対立など見かけ上のものでしかなく、ガタリらは、そのすぐれて政治的な含意を生かすべく、自らの立場を端的に“オルタナティブ”と形容して憚らない。

60年代から70年代にかけて、先進資本主義諸国はなべて、反精神医学運動の猛々しい嵐に見舞われたが、相対的安定期に入ったいま、果たしてそれがどのような成果を精神医学や精神医療にもたらしたと言えるだろうか。この日本でもやはり、60年代後半、精神医療へのラジカルな告発が生じ、精神病理・精神療法学会はいまも活動を停止したままだが、その間に、芸術療法、家族療法、集団療法など、いくつかの群小学会が発足している。言いかえると、中心よりも辺縁に新たな胎動が起こったことになるが、それらも変革へのエネルギーを十分に反映しているわけではなく、病態理解や治療理念については、まったく、以前の枠組にとらわれたままである。いま求められるのは、むしろ、中心の空白を埋めようとする昨今の動き、つまり、狭義の精神病理学的言説の再編成に対し、バロック的とも形容しうる別種の(オルタナティブな)視点を導入することであるように思う。

こういう展望は、むしろ、あくまで私的なものでしかないが、かつてのレイン、クーパー、サスらの反精神医学に比べて、ガタリらのオルタナティブなそれに、より強く共鳴する自分の気持を単刀直入に表現してもいる。ガタリによれば、反精神医学が精神異常者と

社会的疎外とを混同し、狂気の特異性を抹殺したことはたしかで、それだと、家族的、集団的、社会的な次元を重視したところで、安易なヒューマニズムしか生まれてこない。問題なのは、狂気のほうを一般的次元に還元することではなく、反対に、現代世界一般、あるいは、社会的フィールドの総体を、その主観的位置そのものに置かれた狂気の特異さとの関連において、解釈することである。これこそ、あのセンセーショナルな書物『アンチ・エディプス』の中で定礎されるスキゾ分析の課題であり、それゆえ、僚友フーコーがいみじくも喝破したように、それは一つの「倫理の書」として実現されるのである。

精神科医はえてして、そこで狙上りのぼろのがシュレーパー、アルト、ニジンスキーなど、特権的な病者たちでしかないことを理由に、どうしても、この書物を「詩人の戯言」のように受け取ってしまいがちである。私自身について言えば、すでに、ある種の破格に手のかかる分裂病者との治療経験の中で、『アンチ・エディプス』の主要なプロットのすべてに遭遇しており、実際には、臨床のほうで読書に先行したという経緯をもつ。まさしく、私は臨床の現場で、多くの小シュレーパー、小アルト、小ニジンスキーに遭遇してきたのであり、このことがかえって、彼らの著作にふれたとき、通常の読者のそれを凌ぐ驚きを私にもたらしたのではないか。一冊の書物を媒介に、著者の経験と読者のそれとが符合することなど、べつにめずらしくもないが、この場合、正しくは「分裂病者を媒介に」と言うべきところで、やはり、特筆に値するものであると、私には思われる。

ドゥルーズとガタリにとって、問題はあくまで、人類史あるいは個人史において創造の謎をになう分裂病性であり、臨床の場に出没する分裂病者のほうは、むしろ、その病理的なシミュラクル(模倣)にすぎない。われわれ精神科医にとっては臨

床の場に出会う分裂病者こそ何物にも替え難い原点であるが、しかし、こういう一見きこえのよい態度表明だけで、彼らの言わんとすることに目を塞ぐのもあまりに早計である。重要なのは“シミュラクル”というクロソウスキー由来の用語の理解であり、ここではすでに、原物と写しというトリヴィアルな峻別が成立せず、そのどちらとも言えない強度の揺れだけを捉えなければならぬ。分裂病者がろくに哲学書など読みもしないのに、驚くほど哲学的な思索を展開することはよく知られた事実であるが、私の場合、それがしばしば『アンチ・エディプス』の世界を彷彿とさせるものであったと言える。わけでもある種の難治例、すなわち、私が担当する以前、すでにくつかの病院を転々とし、どこでも等しく扱いかねたような分裂病者との出会いにおいて、このことがもっとも顕著に表現されたようにみえる。

精神分析に対する批判ということであれば、われわれは今日、米国精神医学におけるシステムズ・アプローチ、わけでも、ペイトソンを鼻祖とするパロ-アルト派のそれに、もっとも洗練された形を見出すことができる。そこでは、精神分析のように症状の原因を過去に求めるリニアーな発想が斥けられ、もっぱら「いま、ここ」、すなわち現在定位的な、サーキュラー・エピステモロジー(円環的因果律)にしたがって病理が吟味される。反精神医学の論客たちも、レインをはじめ、くだんの「家族の病理」にこの観点からアプローチしたのであるが、スキゾ分析はこれにも満足せず、構造またはシステムに代わる“アジャンスマン”なる概念をもち出す。この語は「組み込み」とか、「作働配置」とか訳されているけれども、もともと、接配や配置という意味でごく日常的に用いられる語であり、それだけに、いざ概念として把握しようとするとき著しい困難が立ちはだかる。

なぜ構造ないしシステムではなく“アジャンスマン”なのかを理解するには、スキゾ分析が無意識のまったく別な概念に到達すべ

く、伝統的無意識を相手どって敢行した一連のないないづくしについてふれる必要がある。ここで問題になるのは、ラカンのいう言語のように構造化された無意識、もっぱら表象内容のみに付託されるそれではなく、歴史の大いなる潮流と直接につながる点で、機械仕掛(無媒介的)と形容される無意識である。新たに把握されたこの無意識は、エディプス・コンプレックスのような一個の普遍的統辞法に還元できる代物ではなく、したがって、それがいかに広汎に出現してしようと、あくまで、特殊ケースとして扱おう要求する。個人間の無意識的諸関係について言えば、相互主観的なそれはたしかにそこで肝要な位置を占めるが、けっして全体を要約するものではなく、無意識の組み込みの中には、それに劣らず重要な諸関係が幾通りも見出せる。

スキゾ分析はこのように、無意識の多様化を禁じる構造論的な解釈格子をとり払い、様様の異質な成分を一つにする“アジャンスマン”に定位するが、このとき、主体がもはや自明ではないことも看過してはならない。こうして要請されるのが、個々の発話行為に先立つ集団的発話装置 (*agencement collectif d'énonciation*) という精妙な複合概念で、これこそ、日常言語学派や語用論の研究には、思いも及ばなかった当のものに他ならない。くだんの用語は、この場合にも、シニフィアンの鎖を逃れる非ディスクール的な諸要素、すなわち、器官なき身体の要素、社会-経済的な要素、生態学的ないし宇宙的な要素などを組み込むべく、フルに活用されている。もし以上のような所説に、その異形同質現象と呼べるものを探し出すとすれば、それはけっして精神分析ではなく、(精神病を主要な対象とする)精神医学のほうに見出せるはずで、次に若干の卑見を述べさせて戴く。

まず思い浮かぶのは、テレンバッハがその卓抜なメランコリー論の中で言及する“*endokosmogene Relationen*”で、こういう生命的ないし宇宙的な律動性こそ、スキゾ分析によって、もっとも重視される要素とみなせる。ヤンツァーリクもまた、西欧精神医学の暗流とも言うべき単一精神病的段階論を再興するにあたり、構造的分節と力動的逸脱との相互交代的な関わりかたを問題にしており、スキゾ分析とほとんど相似のピクチュアを描く。もう一つ、相互交代的な関わりかたの例として、ブランケンブルクのいう行動異常と情態変化とのパトスのな根拠関係を挙げることができるが、そのすぐれて *leibbezogen* な作働は、スキゾ分析の“アジャンスマン”に近い。これらの論客たちはみな、19世紀のロマン派精神医学の末裔たる資格を有するが、仮に反精神医学をその短絡した再現とみなしうるとすれば、スキゾ分析はまさしく「その底を割った」ものと評することができよう。

西欧思想史における無意識概念の系譜をひもとくと、デカルトの“*res extensa*”、ライプニッツの“*petites perceptions*”、カントの *apperzeptiv* かつ *akhaft* な無意識と別に、ドイツ・ロマン派のそれが祖上にのぼる。たとえば、ヘルダーは「われわれの明解な哲学は、不分明な感覚、力、刺激に対してはおしげづき、それらを神にゆだね、(諸種の二頂対立からなる)ライプニッツの将棋盤の上で戯れ続ける」(大意)と述べた。フロイト理論がラカンによる構造主義的な読みかえも含め、西欧近代の王道哲学から滋養を得ているとすれば、ユングの学説は、ロマン主義の無意識概念への端的な逆行を表わしたものと考えることができる。ドゥルーズとガタリは、しばしばクライストやヘルダーリンに言及するし、ロマン主義の生氣的無意識 (*das vitale Unbewußte*) とスキゾ分析の機械状無意識 (*l'inconscient machinique*) との間にも隔世遺伝が見出せる。スキゾ分析はすぐれてフランス的なラカン理論に対し、ある種ドイツ的な戦闘性をもつように思われるし、

ともかく、私の頭の中で、ドゥルーズとガタリの作業がネオ-ハイデルベルグ学派と意外な遭遇を遂げる。

ガタリの歩みの特徴づけるのは、精神分析家と政治活動家の同一個人内における共存であり、このことはわれわれにあのライヒの先例を想い起こさせるが、両者を隔てる距離もけっして小さくは見積もれないように思う。彼は分裂病者と遭遇し、神経症者のそれとは異なる正真正銘の問題を見出したのであり、彼らとともに生きるための倫理的な要請として、シニフィアンの専制に抗するマイクロ政治学の実践を志向するようになったという。彼の立場は、発想そのものがイデオロギー的であるより、スキゾフレニックで、いわゆるヒューマンなそれとは似ても似つかず、したがって、かつての反体制的な精神科医の面々とひとしなみにあつかうのは適当ではない。また、この人物には、セイロンで神秘主義的な瞑想にふけるレインや、片時もウイスキーの瓶を手離せぬクーバーのような不健康さは微塵もなく、会うひとすべてを魅了してやまない若々しく力溢れるやさしさがある。

付記：本稿は『臨床精神病理』第7巻1号(1986年3月)に掲載された拙文(会見記)に、必要な変更を加えたものであることをお断わりしておく。

[主要著作]

1. *L'anti-Œdipe*. (en collaboration avec Gilles Deleuze), Minuit, 1972. (市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社)
2. *Psychanalyse et transversalité*. François Maspero, 1974.
3. *Kafka, Pour une littérature mineure*. (en collaboration avec Gilles Deleuze), Minuit, 1975. (宇波彰他訳『カフカ——マイナー文学のために』法政大学出版局)
4. *La révolution moléculaire*. Recherches, 1977. éd. remaniée, 10-18, 1980.
5. *L'inconscient machinique, Essais de schizoanalyse*. Recherches, 1979.
6. *Mille Plateaux*. (en collaboration avec Gilles Deleuze), Minuit, 1980.

催し物

☆マルチプル増殖する美術展

2月4日(水)まで 於：有楽町朝日ギャラリー (tél. 284-0131)

☆アンドレ・ドララン展 油彩、他

2月7日(土)まで 於：ギャラリー アート・ポイント (tél. 574-6300)

☆デュビュッフエ展

1月24日(土)まで 於：かねこ・あーとギャラリー (tél. 564-0455)

☆フェルナンド・ポテロ展

3月20日(金)まで 於：マルポロー BCC ギャラリー (tél. 404-8001)

☆ローランサンとキュビストたち

1月23日(金)~31日(土) 於：ギャラリー アヴァンギャルド (tél. 423-4484)

☆栄光の18世紀フランス名画展 華麗なる宮廷とシャルダンの世界

1月27日(火)まで 於：東京富士美術館 (tél. 0426-91-4511)

☆20世紀の美術・大原美術館コレクション展

2月1日(日)まで 於：神奈川県立近代美術館 (tél. 0467-22-5000)

*

—原稿募集!

4月刊行予定の臨時増刊〈特集フランス語入門〉のために、読者の皆様から次のような内容で原稿を募集いたします。

- 1) フランス語を始めた動機・学んだ感想。
- 2) フランス語での面白い体験。
- 3) その他フランスに関すること。

●原稿の長さは600字以内。

●締切は62年2月10日。

●掲載分については、薄謝進呈。

●応募原稿はお返しいたしません。

宛先：〒105港区芝3-35-4朝日ビル 白水社 仮事務所 ぶんす編集部 《臨増》係

◇◇◇特集： フーコーの遺したもの



フーコー——思想史的スケッチの断章——

荒川 幾男

ミシェル・フーコーは哲学者なのか、それとも歴史家なのか、といった問題が、ときに真面目に論じられることがあるように、フーコーの仕事の評価には、なお多くの戸惑いがつきまわっている。多分、彼はこれまでの意味での哲学者でも歴史家でもない、といえ、真実の一端に触れることにはならぬが、それではまだ何も答えたことにはならない。まして、彼の仕事を思想史的に位置づけて理解するとすると、少なくとも現代の、それも第二次世界大戦後のフランス思想の全体に眼を配ることができなければならない。ここでは、単に覚書き風の断章を記すほかない。

フーコーは、医師の子として、ポワチエで、1926年に生れている。だから、彼の青春は、第二次大戦末期から戦後にかけての激動の時期に重なっている。そのころ、彼はエコール・ノルマル・シュペリウールに学び、さらに、ソルボンヌで哲学のリサンス(1948年)と心理学のリサンス(1950年)を得、また1952年には、パリ大学で精神病理学のディプロムをとった。このことは、彼の関心が、哲学とともに、人間の心の科学的探求に向けられていたことを示している。その後、ウブサラ大学で4年間講師をしたのち、1959年から60年にかけて、ハンブルクのフランス学館の館長を務める。さらに、1960年代に入ると、クレルモン＝フェラン大学の哲学研究所長を経て、ヴァンセンヌの哲学教授となり、

1970年に、J. イポリトの後をうけて、メルロ＝ポンティと同じ44歳で早くもコレージュ・ド・フランスの教授となった。そして、いうまでもなく、彼の30歳台の半ばから始まる60年代と70年代が、フーコーにとってもっとも豊饒な熟成の時期となった。

ところで、フーコーは、1967年に、パオロ・カルソーのインタビューに答えて、次のようなことを語っている。

「私の世代のみんなと同じように、私も現象学派と、……それに、現象学的方法とマルクス主義の方法との関係の問題のなかで育った。だがまた、同じ世代のものたちと同様、1950年から1955年の間に、一種の転向を経験した。それは、はじめは何でもなかったが、実際には、深く我々を分化させた。……言葉を換えていえば、我々は、いたるところに意味があるというフッサールの考え方を再吟味して、……1955年からは、意味の現出の形式的条件の分析に、もっぱら関心を向けたのである……」

フーコーが育った現象学とマルクス主義を結びつける哲学的問題意識は、いうまでもなく、サルトルとメルロ＝ポンティの世代のものであり、実存主義を中心に、戦後の思想的高揚の中核をなしたものであった。この二つの極を結ぶことは、意識と現実、言葉と物、個人と社会を、どのように関係づけ、調停するかという問題であるとともに、深く戦後の

知識人の生き方と関わっていた問題でもあった。

フランスの戦後は、「奇妙な戦争」の「奇妙な戦後」であったといってもよい。ドイツの占領下で、一方に平穏な生活があるとともに、他方にさまざまなレジスタンスがあった。平穏な生活のなかで、戦前と変らぬ学校生活、学究活動が行われるとともに、マキ団や地下活動の抵抗運動の生活があった。そして、連合軍によってフランスが解放されたとき、力による抵抗運動の中核となっていた共産党のもつ精神的、道徳的威信は、きわめて大きなものとなった。マルクス主義は、精神の世界で、避けて通ることのできない試金石となったといえる。たとえ哲学的に観念論の立場に立っていようと、精神的、道徳的な生き方においては、マルクス主義の世界観は、無視しえないものであった。だから、フーコーは、こういう状況を生きたサルトルたちの世代を、「我々は、生に対する、政治に対する、実存に対する情熱をもった、勇氣ある高潔な世代として経験した」といっている(M. シャプザルのインタビュー)。

解放に続く戦後の激動期は、フランスにとって、国内問題だけでなく、インドシナ、アルジェリアと続く植民地戦争を戦い、同時に米ソの冷戦に否応なく捲き込まれる内憂外患の時代でもあった。少しでも気概のある知識人、学生であれば、「政治」にコミットせずには生きられなかったといいいい。この時期に学生生活を送ったフーコーも、ラジオのインタビューでふともらしたところによれば、一時期、短い間ではあったが、共産党に入党したようである。エコール・ノルマルでフーコーの師の一人であったL. アルチュセールは、捕虜生活から解放されてエコール・ノルマルの教師になると同時に、「プチブル・インテリである自らの出自に負い目を感じ、

この負債を返済するためだけでも」、労働者に奉仕する政治に参加しようと、共産党に入党していた。戦後の騒然たる政治と思想状況のなかで、フーコーもまた、政治に情熱を燃やし、マルクス主義に身を寄せた時期をもったのである。

この時期のマルクス主義の高揚は、哲学的には、フランスにおける「ヘーゲル・ルネサンス」と重なっていた。すでに1930年代に、ロシアからの亡命者A. コジューヴが、フランスにヘーゲル哲学を導入していた。彼の講義は、エコール・デ・オート・ゼチュードで行われたが、1935年の教室には、シャルトルのリセ教師から、パリに帰ってエコール・ノルマルのカイマン(復習教師)となっていたメルロ=ポンティの姿があったし、レーモン・アロン、ジャック・ラカン、ジョルジュ・パタイユらも出席していた。それは、マルクス主義と微妙に結びついたもので、リヒトハイムにいわせれば、「フランスのネオ=マルクス主義は、エコール・デ・オート・ゼチュードの講義室から生れた」ということになる。

しかし、戦後のヘーゲル・ルネサンスを齎す上でもっとも力のあったのは、J. イッポリトである。すでに1941年にヘーゲルの『精神現象学』を翻訳していた彼の主著『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』が世に問われたのは、1947年のことである。この頃パリ大学教授となっていた彼の教え子には、60年代以降の知的革新者となったフーコーをはじめ、ドゥルーズ、アルチュセール、デリダらが出た。彼等は、ヘーゲル哲学を学ぶことでヘーゲル的な「哲学」を捨てることができた。そしてそれは、マルクス主義をヘーゲル主義から解放することを可能にしたといっただろう。のちに、イッポリトの後を襲ってコレージュ・ド・フランスに入ったフーコー

一は、その開講講演（『言語表現の秩序』）で、慣例に従って前任者へのオマージュを捧げながら、イッポリトに負うところを、ヘーゲル哲学から離れ去る道を指し示したことにあるといっている。

こうして、フーコーは、戦後思想のなかに身を浸して青春を過したが、先に見たように、1950年から55年にかけて、一種の「転向」を経験したという。そして、それは、サルトルの世代の実存と政治への情熱に対して、「観念と《システム》と呼びたいものへの情熱」（ジャブザルのインタビュー）を発見したからだ、とフーコーはいっている。

この1950年から55年にかけての時期は、朝鮮戦争の勃発からスターリンの死、そしてその後間もなく来るスターリン批判とハンガリー事件にいたる微妙だが決定的な転換の時期であり、この間に、多くの知識人が共産党を離れた。メルロ＝ポンティがマルクス主義に距離をとり、サルトルと疎隔したのもこの時期であったし、あるいはまたエドガール・モランは1951年に党と訣別し、その他、1956年にモランとともに雑誌『アルギュマン』を創刊することになったロラン・バルトをはじめ、P. フージェロラス、K. アクセロス、D. マスコロ、H. ルフェーヴル等々、やがて新しいマルクス主義を求めてさまざまに独自の思想を展開することになる「アルギュマン・グループ」も、この時期に大きな「一種の転向」を経験している。そして、60年代の知の根底的革新の担い手の多くは、この時期の反スターリン主義的転向者（脱＝マルクス主義者）なのである。

この脱＝マルクス主義は、何よりも、進歩主義的歴史観の批判となった。「幻想のない……マルクス主義」への待望をなお捨てきれなかったメルロ＝ポンティも、ヘーゲル的マルクス主義のもつ全体論的進歩史観を、「そ

の夢想的な甘え、その度し難いほせ、そのフェルト製の暴力」（『弁証法の冒険』）と非難した。新しい「歴史」が、人間と社会についての具体的な問題関心と絡み合っただけで求められることになる。フーコーが自らに課した「歴史」と不可分の哲学的課題は、この時期の経験から生れているといえるだろう。そして、それが、「私には、今日哲学はもはや存在しないように思われる。だが、哲学は消失したのではなくて、多様な諸活動のなかに散乱しているのだ」（R. ベルールのインタビュー）という哲学観に凝縮する。彼は続けて語る、「だから、言語学者や民族学者や歴史家や革命家、政治家の活動が哲学的活動の形式でありうる」と。フーコーにとって、哲学はもはやヘーゲル的な完結した体系ではありえない。そして、この古い「哲学」の廃棄が、その無意識の認識土台にある全体史的「歴史」をえぐり出し、その「観念とシステム」を暴露し、そして、「意味の現出の形式的条件」を分析することのなかで実践される。フーコーの哲学の廃絶＝反哲学は、マルクスの行ったあの哲学の廃棄とはるかに呼応するものといえる。

フーコーの哲学＝反哲学は、戦後のマルクス経験なしには形成されなかった。もちろん、彼が学んだパリ大学やエコール・ノルマルに伝統的であったバシュラールやカンギレームらの科学史・科学哲学と、ブローデルらの「アナール派」歴史学に言及しないのは片手落ちであろう。また、心理学や精神病理学の研究に触れないのも片手落ちであろう。それらのいずれもが、彼の「転向」の土台にあったことは確かである。しかし、フランス戦後思想の渦中でのマルクス経験こそが、フーコーの思想的原点であったことを見落しては、たとえば『知の考古学』序論のマニフェストは十分には理解できないだろう。

（東京経済大学教授）

◇◇◇特集： フーコーの遺したもの

b と p の 間

野村英夫

フーコーが評論の形でとり上げた作家は、ジュール・ヴェルヌ、ブランショ、クロソウスキー、ロブ＝グリエなど多彩であり、また一方ではフロベール、パタイユ、ルツソーらの作品に序文も草しているのだが、しかし彼によって「一冊の書物が書かれるという名誉に与った」(Le Nouvel Observateur, N° 1025, 29 juin au 5 juillet) 作家というのは一人レイモン・ルッセルだけしかいない。おそらくそれは、たんなる偶然といえは偶然そうなたただけの話にすぎなからうが、必然といえはいえないこともない。彼の凄じいばかりの健筆をもってすれば、いま挙げた作家の一人ずつに1冊の作家論を物することなぞ易々たる業であったにちがいないからである。たとえば碩学デュメズィルも碑誌の如きその追悼の小文(同上)において語っているように、「フーコーの知性は、文字通り限界というものを知らなかった」のであり、そうした知性の赴くところは「身体と精神、本能と思想といった伝統的な識別が不条理にみえてくるような人間の領域」、すなわち「狂気、犯罪、性」などの分野であったのだと一応考えておくのが自然であろうし、またそれで一通りの説明もつく。だが、一人の作家を中心に据えた書物が1冊しか残されなかったこと、そしてそれらがほかならぬルッセルだったという事情には、いま少しく微妙な、つまり《必然》的な理由が潜んでいるように思われる。

たとえば『知の考古学』の中に、われわれは次のように糸りを見出す——「一人ならず

のものが、おそらくわたしのように、ものを書いてみると、顔というものが最早やなくなってしまうのである。だから、わたしが誰であるのかを尋ねたり、また、わたしに変わらないように要求したりしないで欲しい。それはいわば戸籍のモラルなのであって、われわれの文書を律するものではないからだ。書くということが問題であるとき、われわれはそうしたものから解き放されてありたいのだ。」

つまり《顔》——一人の作家——に主題を限定すれば、勢い《戸籍のモラル》を避けて通ることは不可能に近くなる筈であり、したがって《書くということ》はなんらかの形でそれにかかわり、従属せざるをえないことになる。そうなれば、《顔》という個のモラルがすべてを支配するようになり、《書くということ》自体のもつ自律性はことごとくそこに吸収されて《透明》と化し、いわば消滅しなければならなくなる。つまり、その存在理由、あるいは自律性というものをそこでほぼ完全に喪失してしまうことになる。そうした過程については、『言葉と物』の中——第8章および第9章——で詳細に分析され跡づけられてもいる。

いわゆる《知の考古学》の立場によれば、19世紀に入って生じた「知の基本的な配置における変化」の1つとして、言語というものが、認識そのものに最も近い位置から認識のたんなる対象の位置に転落するという現象が起る。この転落は、いわば「西欧思想の場全体の転覆」をもたらすほど重大なものだったが、やがてそうした大変動に対して、さまざまな補償作用が現われてくることになる。中でも「最も重要で、最も予期しなかった」補償作用として、次のような事態が展開することになった。すなわち、一方では、言語の下の言語をして語らせるという解釈学の方角(フロイト)と、他方では、言うことの可能な

ものだけに論理的に限定するという形式化の方向(ブール、ラッセル)という二重に分岐した動きを通じて、言語というものがいわば分裂し、断片化し、散逸していくという、20世紀の今日においても愈々顕著にみられる現象が、進行し始める。そこで、言語のそうした一種の空洞化、形骸化に対する「異議申立て」として、そうした全体的な動きとは「別なところ」において、言語をして自ら言語に立ち戻らしめようという企て、言語の「恒久的な自己回帰」の動き、言語の再構成の努力がなされるようになる。これが、すなわち「文学 *littérature* の出現」にほかならない。19世紀以前のいわゆる文学とそれが異なるのは、それが「他のあらゆる言表に反して——みずからの険しい存在を肯定するという以外に法則をもたぬような、そうしたある種の言語というものの無条件の表明」であるという点にある。したがってそれは、思想伝達の言表からも、また、17世紀の古典主義的な価値(趣味、快樂、自然らしき、真実など)の言表からも切離されて、「内容としては、それ自体の形式をいうこと以外に何もない」ような、「語るところのものが、言葉である」(Ce qui parle, c'est le mot.) ような、「単純な書くという行為」(le simple acte d'écrire) そのものに向かうことになる。

たとえばそれは「……あらゆる言表をたった1語に、あらゆる書物を1ページに、世界全体を1冊の書物に全体的に吸収するという」マラルメの企図に、最もよく現われているものなのである。

ところで、そのように「……語の脆い厚みの中に、一切の可能な言表を閉じ籠めようとする」試みは、たとえば先に挙げた作家たちの中でフロベールやブランシヨ——フーコーの「外部の思想」(Critique, N° 229, 1966)はそうした観点から行なわれた最も早い時期の、すぐれたブランシヨ論の1つだが——などのうちにも明らかにみてとることができるのだが、生前ほとんど認められることなくして終わったレイモン・ルッセルほど純粋に——

ということはずまり論理的な厳密さをもってということなのだが——その可能性を極限まで追求した作家は、ほかに——たとえばミシェル・レーリスなどを除けば——見当たらないであろう。彼の全集がだされ、研究書や論文も数多くみられる現在では、最早や周知の事実なのだが、ルッセルの制作方法は、厳密な意味で語そのものに局限されているのである。たとえば、彼自身の説明によれば、ほとんど同じな2つの語、billard と pillard をえらびだし、この2つの語のまわりに、同じだが異なった2つの意味にとれる言葉を付け加えていくことによって

Les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard...

Les lettres du blanc sur les bandes du vieux pillard...

という、ほとんど同じだが意味の異なった2つの文を拵え上げる。訳してみれば最初の方は「古い玉突き台の緑の上の白チョークの文字……」となり、あとの方は「老掠奪者の軍団についての白人の手紙……」となるが、「老」と「古」、「軍団」と「緑」、「白人」と「チョーク」、「手紙」と「文字」という意味の振幅がすべて b と p の間の紙一重の差に依存しており、いわばそのように依存することによって始めてそこに未聞の「無限」の世界が拓かれてくる可能性を示しているのである。ルッセルは前者を冒頭の文、後者を終末の文として、その間隙を埋める形で物語を創り上げていく。それは、つねに b と p の間のわずかの相違(「脆い厚み」)から始まり、そしてまたつねにそこに立ち戻るという方法なのである。つまりそこには、「単純な書くという行為」の最も純粋な状態が現出することになる。フーコーの巧みな、そしておそらくは適確な比喻によれば、そうした「ほとんど感知しえないような屈折」や「微細なショック」などが、いわばエピキュラスの体系の原子の間隙「クリナメン」clinamen の如き作用をしてルッセルの言語の「位相空間」を生みだしているのである。(早稲田大学教授)